

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

フーコー研究—人文科学の再批判と新展開

Foucauldian Studies : Reassessment and New Developments in the Human Sciences

2. 研究代表者氏名

小泉義之

KOIZUMI Yoshiyuki

3. 研究期間

2017年04月 - 2020年03月 (2年度目)

4. 研究目的

今日のおおよそコーパスが確定されつつあるミシェル・フーコー(1926-84)の膨大な仕事の中核には、西洋近代に淵源する「人文科学」の歴史的批判の試みが置かれている。実証研究の再読と哲学的考察を交差させ、狭義の認識論に還元されない政治的・実践的な射程をもつフーコーの仕事は、現在もなお世界の人文・社会系諸学において避けて通れない参照項であり、その重要性はますます高まりつつある。だが、フーコーを方法論として応用しようとする試みや、それぞれの分野でフーコーを継承もしくは批判しようとする取り組みのなかでは、フーコー自身の仕事の変遷や内的一貫性が顧慮されることは必ずしも多くない。また、フーコー自身の仕事を対象とする研究はもっぱら哲学史や思想史の領域で行われ、フーコー自身が再検討の対象とした「人文科学」諸分野の動態にまで遡ってフーコーの仕事の意義を究明する研究は稀にとどまっている。本共同研究は、「人文科学」諸分野の第一線の研究者を結集し、フーコーの仕事総体の意義を現在の「人文科学」研究者の観点から多角的に明らかにするとともに、フーコーによる「人文科学」批判の歴史的価値と現時点でのその可能性を見きわめることをめざす。

5. 本年度の研究実施状況

本共同研究の中核は、班員がそれぞれの研究報告を行う研究会(例会)である。2年目となる本年度は、ここまで、全3回の例会(各回2日連続、したがって6日、ただし、第3回例会2日目は台風接近により延期)を開催、そのうちの1日(第三回例会1日目)をゲストを招いての公開研究会として企画し、2017年に刊行されたフーコー『性の歴史』第4巻『肉の告白』の検討を行った。本年度はさらに、1月末および3月半ばに2回の例会(全4日+延期された第3回例会2日目のスライド開催)を予定している。また、本年度より、研究班の内部に「フーコー講義」及び「科学史(的観点からのアプローチ)」をテーマとする二つのサブ・グループを設け、本研究班の内部を構造化した。本年度第4回および第5回例会は、これらのサブ・グループのイニシアティブによりそれぞれ開催される。なお、本年度5月から6月にかけて、「人文研アカデミー」にて、連続セミナー「〈68年5月〉と私たち」を主催し、本研究班のメンバー10人が登壇、毎回好評を得た。

6. 研究成果の概要

なし

7. 本年度の研究実施内容

2018-05-12 第1回例会(1日目)

〈私たち〉の構成——後期フーコー研究の知見から再読した『知の考古学』における主体

発表者 松本潤一郎 就実大学

フーコー研究の最近の動向と今後の展望

発表者 箱田 哲 天理大学

2018-05-13 第1回例会(2日目)

『臨床医学の誕生』を読む

発表者 田中祐理子

真理と真理体制——フーコーの「スピノザ」

発表者 市田良彦 神戸大学

2018-07-14 第2回例会(1日目)

言語、鏡、セイレーン フーコーの初期文学論

発表者 藤井俊之

フーコーと〈ルソー〉——『ルソー、ジャン=ジャックを裁く:対話』を巡りつつ

発表者 佐藤淳二

2018-07-15 第2回例会(2日目)

パレーシア論を批判的に読む

発表者 堀尾耕一 一橋大学・非常勤

父さん、歴史は何の役に立つのか説明して——マルク・ブロックに言寄せて

発表者 長原 豊 法政大学

2018-09-29 第3回例会(1日目):

公開研究会「Histoire de la sexualité 4 Les aveux de la chair を読む」『肉の告白』——私の読みどころ

発表者 立木康介

意志と主体——『肉の告白』におけるフーコーのアウグスティヌス読解——

発表者 相澤伸依 東京経済大学

「情欲の主体の分析論」について

発表者 慎改康之 明治学院大学

自己に対する関係の変容?

発表者 近藤智彦 北海道大学

2019-01-25 第3回例会(2日目)(台風のため9月から1月に順延)

生権力/生政治とは何か——レイシズム、自由主義、新自由主義

発表者 佐藤嘉幸 筑波大学

「以上は、ネオリベラル派が言うはずであろうことに最も近く寄り添った場合の私の物事の見方です」——規

律権力論からリベラル統治性論への移行について

発表者 廣瀬純 龍谷大学

2019-01-26 第4回例会(1日目)

La Société punitive を読む——le pénal と le punitif をつなぐ la moral に注目して——

発表者 相澤伸依 東京経済大学

生的=主権的複合体——フーコーの人文科学批判の射程——

発表者 藤田公二郎 西南学院大学

英米圏哲学者たちによるフーコー解釈——〈批判理論〉から「戦闘性」まで——

発表者 布施哲 名古屋大学

2019-01-27 第4回例会(2日目)

フーコーにおける「狂気」の言語の問題

発表者 武田宙也 京都大学大学院人間・環境学研究科

『主体の解釈学』における法の問題について

発表者 西迫大祐 明治大学

啓蒙、革命、パレーシア——80年代フーコーの思想における「現在」

発表者 坂本尚志 京都薬科大学

フーコーとポピュリズム

発表者 箱田哲 天理大学

2019-03-16 第5回例会(1日目)

強迫神経症的主体の終焉、あるいは倒錯的な抵抗の線を引くことの「不可能性」について

発表者 久保田泰考 滋賀大学

狂気、主体、真理——フーコーとラカンにおけるデカルト的コギトの問題をめぐって

発表者 柵瀬宏平 東京大学(博士課程)

2019-03-17 第5回例会(2日目)

『カントの人間学』を読む

発表者 田中祐理子 京都大学文学部/白眉センター

エピステモロジーサークルのフーコー——析出する考古学、蠢動する系譜学

発表者 坂本尚志 京都薬科大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

【公開連続セミナー】人文研アカデミー「〈68年5月〉と私たち」(5月10日、17日、24日、31日、6月9日):佐藤淳二、小泉義之、上尾真道、立木康介、佐藤嘉幸、廣瀬純、田中祐理子、王寺賢太、布施哲、市田良彦(登壇順)【公開研究会】「Histoire de la sexualité 4 Les aveux de la chair を読む」(9月29日):慎改康之、近藤智彦、立木康介、相澤伸依 ジュディス・バトラー『アセンブリ』検討会(12月9日、明治大学文学部哲学専攻、筑波大学人文社会科学研究所との共催):ジュディス・バトラー、佐藤嘉幸、清水知子、廣瀬純【著作】市田良彦『ルイ・アルチュセール——行方不明者の哲学』(岩波新書、2018年9月)小泉義之『あたかも壊れた世界 批評的、リアリズム的』(青土社、2019年3月)王寺賢太・立木康介編『〈68年5月〉と私たち「現代思想と政治」の系譜学』(読書人、2019年3月)【論文】上尾真道「「すべて

でない」地平における政治的審級について』、『思想』2018年9月号 藤田公二郎「狂気の呼び声——フーコーの超越論的考古学とその自己解体」、日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』(2018), 23: 271-281 西迫大祐「フーコーの法権利について」人文學報 (2018), 112: 87-109 ジュディス・バトラー「恐れなき発言と抵抗」(佐藤嘉幸訳)、『現代思想』2019年3月臨時増刊号「総特集＝ジュディス・バトラー:『ジェンダー・トラブル』から『アセンブリ』へ」(2019年3月) 佐藤嘉幸「個人的パレーシアから集団的パレーシアへ——「恐れなき発言と抵抗」へのコメント」、同上 廣瀬純「「恐れなき発言と抵抗」へのコメント」、同上 Otto Pfersmann, Michel Foucault face à la complexité des univers normatifs, ZINBUN (2019), 48: 57-77 Nobuyo Aizawa, Comment les féministes japonaises ont-elles réagi à propos de la pilule ? : Vision du corps et du couple au sein du mouvement Ūman-ribu, ZINBUN (2019), 48: 1-9 王寺賢太「〈68年5月〉の原風景——西川長夫撮影・西川祐子所蔵の写真から」、王寺賢太・立木康介編『〈68年5月〉と私たち「現代思想と政治」の系譜学』(読書人、2019年3月)、(口絵解説) 佐藤淳二「〈68年〉から人間の終わりを考える」、同上、pp. 17-39 小泉義之「〈68年〉以後の共産党——革命と改良の間で」、同上、pp. 41-72 佐藤嘉幸「ドゥルーズ＝ガタリと〈68年5月〉(1)——『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』をめぐる」、同上、pp. 73-93 廣瀬純「ドゥルーズ＝ガタリと〈68年5月〉(2)——「〈68年5月〉は起こらなかった」読解」、同上、pp. 95-119 上尾真道「〈68年5月〉と精神医療改革のうねり」、同上、pp. 121-142 立木康介「〈68年5月〉にラカンは何を見えたか」、同上、pp. 143-179 田中祐理子「学知ってなんだ——エピステモロジーと〈68年〉」、同上、pp. 181-203 王寺賢太「京大人文研のアルチュセール——〈68年〉前後」、同上、pp. 205-230 布施哲「偶像の曙光——イギリス「新左翼」についての小論」、同上、pp. 231-251 市田良彦「〈68年〉のドン・キホーテ」、同上、pp. 253-267 【翻訳】テオドール・W・アドルノ著、岡田暁生・藤井俊之訳『アドルノ音楽論集 幻想曲風に』(法政大学出版社、2018年12月)

9. 研究班員

所内

立木康介、佐藤淳二、王寺賢太、森本淳生、瀬戸口明久、田中祐理子、藤井俊之、武田宙也、春木奈美子、沈恬恬

学外

小泉義之(立命館大学)、市田良彦(神戸大学)、長原豊(法政大学)、上田和彦(関西学院大学)、布施哲(名古屋大学)、佐藤嘉幸(筑波大学)、廣瀬純(龍谷大学)、隠岐さや香(名古屋大学)、前川真行(大阪府立大学)、北垣徹(西南学院大学)、中井亜佐子(一橋大学)、千葉雅也(立命館大学)、松本潤一郎(就実大学)、西迫大祐(明治大学)、相澤伸依(東京経済大学)、藤田公二郎(西南学院大学)、櫻田和也(大阪市立大学)、箱田徹(大阪市立大学)、上尾真道(滋賀大学)、堀尾耕一(一橋大学)、TAJAN, Nicolas(国立精神神経医療研究センター)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	9 (3)	0	0	3 (3)	80 (20)	0	0	20 (10)
学内	2	3 (0)	0	0	1 (1)	15 (5)	0	0	8 (5)
国立大学	6	7 (2)	0	0	0	35 (5)	0	0	0
公立大学	2	2 (0)	0	0	0	12 (0)	0	0	0
私立大学	8	10 (1)	0	0	0	80 (10)	0	0	15 (5)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1 (0)	1	0	1 (0)	4 (0)	4	0	4 (0)
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関		1 (1)	0	0	1 (1)	4 (4)	0	0	4 (4)
その他		1 (0)	0	0	0	2 (0)	0	0	0
計	20	34 (7)	0	0	6 (4)	232 (44)	0	0	51 (24)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	16(12)
国際学術誌に掲載された論文数	1(1)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載	主なもの	
	論文数	論文名	発表者名
思想	3	「すべてでない」地平における政治的 審級について	上尾真道

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

13. 次年度の研究実施計画

平成 31 年度も、昨年度・本年度同様、年間 5 回(1 回につき 2 日、したがって計 10 日)の定例研究会を行う(その一部は公開研究会としたい)。本年度より 2 件の外部資金が獲得できたため、拠点経費の減額分はこれらの外部資金により賄う。これらの例会では、最終成果の公表に向けて、毎回、構造化されたテーマ設定や提題設定を行い、議論を深めたい。また、例会とは別に、海外研究者を招いての国際集会在すでに 1 件プログラムされているが(6 月)、それ以外にもさらに 1、2 件の国際集会(シンポジウム)を企画する。なお、最終成果に先立ち、平成 31 年度には『思想』誌上にて本研究班メンバーによる特集が組まれる予定であり、その機会を本研究班の中間報告として利用する考えである。メンバー個人による成果公表も順次行っていく。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 5 回 国内出張旅費(延べ 55 人)	支出予定額 1,400,000 円
合計			1,400,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

「次年度の研究実施計画」欄にも記載したとおり、最終成果の公表に向けた取り組みを平成 31 年度よりはじめる。テーマや課題を段階的に絞り込み、相互の連関を緊密化しつつ、全体の議論を深めていく。平成 31 年度には、それとは別に、一般誌誌上にて中間報告をまとめる。個人による成果公表は順次行っていく。また、本研究班の取り組みを海外の先端的な業績と比較・検討し、国際的な連関のうちに位置づけることができるよう、外国人研究者を招いての国際集会(公開シンポジウム、公開ワークショップ)を数件開催する。